	<h1>W.A.Mozart Hiroba</h1> <p>「モーツァルト広場」 SINCE 1995</p> <h2>第24号</h2>
---	---



「憧れのパリ」を訪ねて

……聴いて欲しいモーツァルト その21

会員番号 K618 加藤 明

この四月、ひょんなことから芸術の都パリを訪れる機会に恵まれました。

私の勤務する会社が他の協賛会社と一緒にあって、パリの日本文化会館での「きりたんぼ食味会」に調理担当として参画することになり、私もひょっこりその企画に相乗りさせてもらったという次第でした。

パリ（フランス）といえば、私にとっては高校生のころから音楽よりは小説や詩といった文学やセザンヌ、モネ、モジリアニなどの絵画の方で憧れと親しみのある都市（国）でした。

そんな芸術の都に仲間と一緒にに行けることになった私は、無垢な少年のように（多分に今でも純な少年ですが？）こころ踊らせながらパリに全身を預け、感応して帰りました。

以前も会報で吐露したことがあります。私は高校時代に決して褒められた生徒とはいえ、特に3年生ともなると受験の緊張感とは反対方向の、人生への懐疑的な自己を持って余す日々を送り、半ばグレかかっていたものでした。

勿論、このころの私が好んで関心をもった音楽の一つにモーツァルトがありました。とりわけ「パリ交響曲」は青春の音楽そのもの、頻繁に聴いていた一曲でもあります。

そんなこともあって、モーツァルトと因縁の

深いパリを訪ねることというのは、大変興味深い内的ハプニングだったのです。

さらに、そんな若く下卑た時代に発見した当時のフランスを代表する作家、J・Pサルトルには（かつてに）ずいぶんと薫陶を受け、その周辺を読みあさっていたことから、今回のパリ行きが決まった時、この師匠サルトルが自然に思い浮かび、彼がボーヴォワールと一緒に眠っているお墓にお参りをしたい、という思いも生じたわけです。

モーツァルトのパリに関しては後述するとして、サルトルのお墓参りについて一言。

サルトルのお墓は生涯連れ添ったボーヴォワールが共眠しており、一目で判別できるほど明るい土色のお洒落なお墓でした。

当日も綺麗なお花が乗せられておりましたが、さる物知りの言では、このお墓だけは今でも献花が絶えることが無い、とのことでした。

後で気がついたのですが、サルトルもボーヴォワールも（6年の時差はありますが）4月に亡くなっております。

サルトルの亡くなったのが4月15日、ボーヴォワールは14日、私の墓参りは13日という偶然には驚きましたが、サルトルは今年没後30年の

アニバーサリーの年に当たっており、何かの因縁を感じてしまいました。

開高健はサルトルと1961年パリで会った印象を「その文章とは真逆の気さくで人懐っこい、ヤブにらみのしぶとそうな小男」だったと語っていましたが、私はサルトルから「きみが何にも出来ない人間だなんて当たり前だよ。だから、なんでも出来るんだよ。屁理屈言わずとにかくやってみなさい」といった勇気を与えられたように思います。



サルトルは人生を楽天的には示してくれませんでした。確かに私の肩の力を抜いてくれた恩人でした。

私をお墓に案内してくださったI女史はM・デュラスのファンということで、同じモンパルナス墓地のデュラスの墓を詣でておりました。

しばしの感慨にふけたのち、墓参の効能というべきか、パリの春風を仰ぎながら二人ともども何か横手のつかえがとれたような晴れやかな気分でお墓を後にしました。

■ショパンとシューマン生誕200年に因んで

ショパンの生誕200年というアニバーサリーにあたる今年、私の予想通りというかやはり日本特有の騒ぎ方で進行中のようです。

同い年生まれのシューマンはどこに行った？と、へそ曲がりの私はこのブラムスの発見者にして偉大な支援者を捜し始めていました。

なんとというか、シューマンが不当に脇に寄せられている印象が拭えませんでしたから。

こんにちのエートスでは、シューマンの過剰とも思える真面目さや極度に抽象化した音楽的なパトスは受け容れがたいのものかも知れませんが。

とにかく彼は矯激な自己意識の人でしたし、晩年は（梅毒性の）頭痛に悩まされるという不遇な末路をかこったのですが、たとえば《クライスレリアーナ》の情念のほとぼしり一つとっても、たいへん魅力的で私なんぞはその深淵さがたまらなく好きなんです。

ところで、読者諸氏はショパンには彼が敬愛したモーツァルトの変奏曲が一曲あることをご存知でしょうか？

《「お手をどうぞ」による変奏曲》（別名「ドン・ジョバンニ」による変奏曲）というのですが、ドン・ジョバンニと村娘ツェルリーナの二重奏で、ドン・ジョバンニの誘惑のシーンで

歌われる甘くてちょっと切ない素敵なデュエットです。

この曲をショパンはピアノとオーケストラという大編成で、全7曲というスケールの大きな変奏曲に仕上げております（もう立派なピアノコンツェルトですね）。

随所にショパン特有のピアノイズムが活かされた素敵な作品となっていて、聴きだすとモーツァルトとショパンの二人を楽しんでいるようで、一石二鳥の不思議な気分を味わうことができます（今回、この曲の存在に気づいたきっかけがショパンの生誕祭と無縁でないことを思うとこうした日本的な企画も悪くない、とチャッカリ好いとこ取りする私ではありますが・・・）。

ご多聞に漏れず、芸術の都パリでも、ショパン、シューマンの生誕200年祭の匂いは少なくとも日本ほどは感じさせてはおりませんでした。

ショパンは丁度20歳のころ、政情不安なワルシャワを逃れてパリに定住し、そこで結核を患い39年の短い生涯を閉じましたが、今日我われがよく耳にするノクターン、ポロネーズなどのほとんどはパリまたはジョルジュ・サンドと暮

らしたマジョルカ島で作られており、もっとパリでは目立ってもいいようなものですが（当のショパンは今回適いませんでしたが、ポーマルシェ、バルザック、モジリアニ、など多くの芸術家とともにパリ郊外にあるペール・ラシェーズ墓地に眠っております）。

■モーツァルトの母、マリア・アンナの葬儀を執り行った教会を訪ねて

4月11日（日）目指す教会『サン・トゥスタッシュ教会』を仰ぐことができました。丁度、夕方6時の日曜ミサが始まる直前に教会内部に入ることができたのは幸いでした。

この古くて美しくも威厳ある教会は、1778年7月4日にマリア・アンナのお葬式が執り行われた教会です。

位置的にはルーブル美術館に近いパリのほぼ中央にその教会はありました。

16世紀の前半から17世紀前半まで約100年間を要して建てられた、構造からくる流麗な厳かさやステンドグラスの美しさで何人をも黙らせるほどの迫りに圧倒されました。

さらに、礼拝堂に対面する天井から響き渡る7000本のパイプが奏するオルガンの音色に包囲



された私は俄かに耳朶の緊張と足元の震えを覚えたものです。

私は躊躇しながらも、一步一步230年前モーツァルトがこみ上げるものが多すぎて、ただ呆然と立ち尽くしたであろう礼拝堂付近に立ち入り、両手を合わせて拝みました。

無意識な拝礼に服した私がふと我に還ったのは、朗々たるミサを先導するテノールが全館に隈なく響いたその瞬間でした。

「ああ・・・」、たいへんに美しいテノールとそれにつづく合唱でした。

こころの底から「そこ」に身を委ねることが赦され、一切の邪念を払いのけさせ、どこからともなく発せられるという異様な美しさでした。

ひとたびその内部に足を踏み入れた途端、どこかい館内の隅々まで響き渡り染み込むような、それでいて、自然すぎるほど自然な合唱という「声の楽器の集合」形式のもつ浄化力が感じられ、我を忘れて魅入られるのでした。

そして、連鎖的にモーツァルトのシンボル曲とも言える《アヴェ・ヴェルム・コルプス》や《サンクタ・マリア・マーテル・デイ》を即座に想い描いたのは至極当然のことでした。

マリア・アンナは1778年7月3日、この教会から遠くない、うらびれた小さなアパートの一室で息子モーツァルトに看取られて世を去りました。

享年57歳（当時の平均寿命からすると高齢の部類ですが）。

想い起せば、マンハイム・パリへの就職探検旅行のために、前年の9月に夫レオポルトの命により息子ヴォルフガングの付き添いとして（外国語を話せない監視役として）、ザルツブルクを後にして一年に満たない、あまりにあっけない最期でした。

（この就職探検旅行の安全を祈願して直前にモーツァルトが作った四部合唱《サンクタ・マリア・マーテル・デイ》を先年モーツァルト広

場でカンパネラコールの皆さんにご披露頂き感銘を受けた記憶が冷めやしません）

パリに着く前のマンハイムに約半年も滞在し、レオポルトに言わせると「無用に長く居過ぎた」マンハイムを後にしたモーツァルトと母マリア・アンナは10日間馬車に揺られて3月下旬に12年ぶりのパリの土を踏んだのでした。

しかし、この10日間の馬車の旅は初めは天候に恵まれたものの、マリア・アンナがザルツブルクの夫レオポルトに送った手紙によると、「最後の二日間は風で息がつまりそうで、雨をすっかりかぶってしまい、私たち二人は馬車の中で洗濯物のようにずぶ濡れになり、もう全く息ができませんでした」という悲惨な状態での馬車の旅だったことが偲ばれるのです。

案の定、パリについてからのマリア・アンナは体調を崩しており、「まるで牢屋にいられているようです」との悲痛な叫びを綴った手紙をレオポルトに送りつけております。

息子はとにかく一日も早く就職口を捜して一定の収入を得るべく、旧知の貴族や音楽関係者との接触に奔走する毎日でした。

つまり、外に出ても言葉は通じないし、部屋は狭くて窓がなく暗くて不衛生だし、息子はほとんど部屋に居ないし、ザルツブルクから遠く1000kmも離れたパリはあまりにこの田舎育ちのおばさんには過酷な大都市だった、と推われます。

「・・・どうかお友達の皆様によろしくお伝え下さい。私たちはほとんど毎日ザルツブルクのお友達のことを話し合っていますし、この人たちが私たちのところにいらっしゃればいいなあ、と願っております。皆さんが当地で見るべきものをみたら、眼もまんまる、お口あぐりのことでしょう。ごきげんよう。お二人ともお元気で。あなた方お二人に何千回もキスします。私はあなたの誠実な妻です。もう終わりにします。腕と眼が痛むのです。」

これは6月12日、死の三週間前にザルツブル

クで留守番をしていた夫レオポルトと娘のナンネルに宛てた手紙の末尾のことばです。

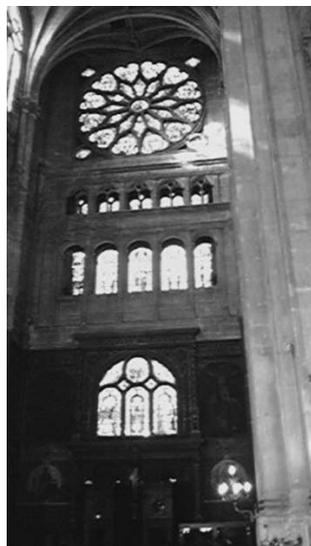
そして、この書簡を書き終えたマリア・アンナは病床に伏したまま、二度と起き上がることもなくあっけなく昇天したのでした。

なお、マリア・アンナの亡骸は一端サン・トゥスタッシュ教会付属の墓地に埋葬されたあと、パリ南部のカタコンブ（キリスト教の地下秘密墓地）に移されたと伝えられております。

この母マリア・アンナの訃報をザルツブルクの父と姉に届けるに際して、モーツァルトがとった衝撃をやわらげる配慮はよく知られているところであるが、このアウェイでの肉親の死は22歳のモーツァルトを精神的に強く鍛えたかのように私には写るのです。

思い起せば、直前の訪問地マンハイムでのアロイジアとの劇的な出会いと破局（失恋の匂いが強い）のあと、パリに乗り込んで間もない母との永遠の別離であり、人一倍感受性の鋭利なモーツァルトが囚らずも人生の苦渋を味わい、儂さを痛感し打ちのめされたであろうことは容易に推測できるのです。

現に、このころの作品として伝えられているイ短調のピアノソナタ（K310）やホ短調のヴァイオリンソナタ（K304）にはそれまでにない深い陰影を含んだ音調が刻まれているのではないのでしょうか。



私はモーツァルトの総ての作品に分泌される特有の軽妙さは根っからの人生肯定主義者であり、明け透けな楽観主義者でもあった母マリア・アンナの性格に負うところが大きい、と感じています（マリア・アンナは夫レオポルトとの間に7人の子供を生みましたが、成人したのは三女のナンネルと末っ子のヴォフガングの二人だけでした）。

モーツァルトは生涯この無垢で愛すべきザルツブルク人の母の手の上で創作した、といてもいいと思います。

息子のためなら、とパリの酷い環境に置かれても辛抱する健気な母でした。

それほど深い愛情を注いでモーツァルトを育て慈しんだマリア・アンナでした。

あらためて母という存在は子供にとって巨大なものなんだ、という歳をとると忘れがちな原点を思い起させてくれたモーツァルトであり、この度のサン・トゥスタッシュ教会の訪問でした。

時刻が迫り、しぶしぶと教会を去るとき、美しく巨大な教会の全景を写す私の脳裡をまたしても《サンクタ・マリア・マーテル・デイ》の美しい歌声が占領していきました。

End

□推薦盤 → K310 ピアノソナタ イ短調

モーツァルト広場 名誉会員 久元祐子さんの「青春のモーツァルト」に収められている盤がおすすめです。（ALCD-9075）

激しさに振り回されていない、達観してもいい、それでいてモーツァルトの人生への肯定感が感じられなければならない。

こうしたデリカシーが瑞々しく行きわたった正に名演です。

是非、お聴きください。

一つの出会い

会員番号 K478 岡部 久子

極く、最近のことだけれど、あれは何だったかなーと、思っていることがある。

一つの出会いと言ってもいい。

久しぶりに秋田へ出て来た友人と、昼食を一緒にし、駅で別れたあと、私は、帰りの電車を待つ時間もまだたっぷりあるしと、又、駅周辺を歩きまわった。

あちこちと歩きすぎて、くたびれて、喉も乾いた。そこで、一番近くのソフトクリームの店へ入った。そこでのお話。

カウンター奥のテーブルスペースは、ひっそりとしていて、入口付近でしゃべっていた女子高生2人が食べ終わって行ってしまうと、まん中の大きなテーブルに座った私一人と、私より一足先に店へ入った女の人が、一番すみの席に一人いるだけだ。

あとは誰もいない。

ソフトクリームは、おいしくて、一気に食べおえた。

やれやれと立ち上り、手さげバックの中のハンカチなどをさぐっていると、「ああ、やだやだ」とかなり大きな声が聞こえてきた。

すみに座っていた女の人だ。ケータイで話しているのかと思って、ふと目をやると、そうではない。

その女の人も、私と同じようにカバンの中をさぐっている格好で、声を出している。

「あーやだ、やだ、こんなことをしていられ

ない」と又、言っている。

私が見ていることに気づいて、恥ずかしそうに「こんな声出して」ともごもご、言ったようだ。

人は、見ただけで、相手がどんな人か分ることもある。

決して“怖い人”ではない。

ソフトクリームをゆっくりと食べた気易さのせいで私はつい「困ったねー」と言ってしまった。

するとその女の人も私を怖くない、と思ったのか、むこうの手洗い用の水道蛇口を指さして、「あの水飲めるだろうか？」と言う。

「飲めるよ、日本の水道はどこでもね」と私。

「そうだね、水道も飲めないとおしまいだ」とか言って、その人は何やら薬の小袋をとり出した。

言わなくてもいいものを「何の薬」と聞いてしまうと、「胃薬」と相手は言う。

「コップを借りたら」と言ったけれど、彼女は、いい、いい、と蛇口で、手で水をすくって飲んでいる。

小走りに席へもどってティッシュペーパーを取り出して来て、自分のこぼした水をあちこち、床まで拭き取っている。

なんて正直な動作と私は思う。席へもどると、さっきの続きのように「こんなこと、してられない」と言っている。

私は、「まだ若いんだからね」と言った。

70才は過ぎると、大概の人にむかって、こう言える。

「50過ぎたよ」と、相手の人は言う。

「若いじゃないの！大丈夫、大きな声、出せるだけでいい」と言うと、「こんなふうに言われることない。うれしい」と言う。

声をかけられたことが、うれしいと言うことだったろうか？私は、帽子も、マフラーも、身につけてしまったので、席を立つ。

そして、思い切って、別れの挨拶を相手に言うことにした。

ちょっと芝居がかった声で、「どこのどなたか存じませんが、がんばってね」と相手の人は、「ありがとう。どうも」と言った。

これだけのお話。

今、思っても、あの人の顔はおぼえていない。

全体の姿ならおぼえているが。言葉の印象が、あまりに強かったからだろう。

何があって、どうした人だったか。と思い、忘れられない。

あの日、久しぶりに、友人と話したことも、あの人に会えたことも、一期一会か。

それにしても、今の世の中、大声を出して、さげび出したい人は、沢山いるのかもしれない。

私は、幸い、日々（不安なことは、次々にあるにしろ）まずは、静かに暮らしている。

出来ることなら、“どこの誰だか、知らない人”に、言葉でもなぐさめられない苦しい時に、音楽は、じーんと心にしみてくるよ、と伝えてあげたいなー。

酒とモツの日々 (24)

会員番号 K488 佐藤 滋

先日、某BS局の「こころの歌」という番組で、ある男声グループが古い軍歌を歌っておりました。無論、戦争を知らない若い歌手の皆さんですが、その真剣で力強い歌声に、たちまち魅入られ、思わず涙が止まらなくなりました。私のように困難から逃げてばかりのダメ人間をも惹き付けてやまない歌声だったのです。客席の紳士はみな涙を流して聴き入り、なかにはステージに合掌する老婦人もおられました。音楽の包容力、時を超えた存在感をあらためて思わせるひとときでした。

生まれた時点では、何の力もなかった音の連なりが、時代という荒波を生き抜いて、多くの人々の喜びや悲しみに寄り添い、受け止め、響

き会って、その音楽の個性を磨き上げてきたのだと思います。「徐州」へ行ったことも見たこともない私でさえ、その歌声を通して夕日の荒野や、戦友を気遣う優しさに、自分のちっぽけな人生経験を重ね合わせて、言葉にならない励ましや、叱咤を受け止めるのです。

だからといって、この場面にベテラン歌手が登場し、自身の経験・実績を投影して、思い入れたっぷりに歌ったら、果たして私は泣けたでしょうか。

最近よく感じることなのですが、クラシック音楽でも「本場」の大家の演奏や、数多くの留学・師事数を誇る人の演奏よりも、日本人の真っ直ぐで、真摯な演奏の方に、より魅力を感じ

じることの方が多くなりました。「こうあらねばならぬ」「これこそが正統だ」よりは「私はこう思う」「こう感じる」と訴えてくれる音楽のほうが、歴史の錆や埃を洗い流して直接心に響くと思うのです。

「麦と兵隊」の歌は誰でも知っています。もう泣く準備は出来ていたのかもしれませんが、けれども涙の防波堤は、権威や名声で簡単に崩れ落ちるものではありません。それができるのは、現代の聴衆が無意識に求めているもの、あるいは見失っているものを提示してくれる演奏だけです。生き抜いた曲を通して、歴史のかなたの若い兵士の魂が、ステージ上の若い歌手の真剣でひたむきな演奏に移り「元気をだせ」「お前は何をやっているんだ！」と呼びかけてくるのでしょう。

酒の世界でも、慣習に捕らわれない若い感性による新製品が陸続と登場しています。0.00%のノンアルコールビール、ハイボールの日本酒、様々な果実によるワイン等々。素晴らしいではありませんか。多くの研究が、古い物に新しい感性を加えて、現代の世に役立つ製品を生み出しているのです。

軍歌でさえ若い声によって現代によみがえり、中年男に「活」を入れてくれます。まだまだご用済みの音楽ではないのです。

ましてや我らがモーツァルト。今でなければ心に届かない、未来の人にこそ受け入れられる新鮮な演奏、解釈が無限にあるはずです。これからも彼の音楽は現代、未来の人々に喜びや慰めを与えてくれるに違いありません。

事務局より

モーツァルト広場も活動開始から15年が経ちました。私は活動当時から在籍していたわけではありませんが、すっかりモーツァルトのいや加藤代表のファンになり日々を過ごしております。

15年前皆さんは何をなさっておりましたか？95年は1月に阪神淡路大震災が起り、3月には地下鉄サリン事件、村山改造内閣が発足し、巨人軍の原選手が引退、相撲界では曙太郎と貴乃花が優勝を争い、野茂英雄投手がメジャーデビュー、そしてマイクロソフトがパソコンの基本OSであるWindows 95を発売した年でした。

10年一昔と言われた時代の流れが、今はさらに加速し5年という年月でもかなり前

の出来事のように思えます。

そんな中でも250年以上前の音楽を楽しんでいるこの広場の存在はとても貴重なものだと思っております。サマーコンサート、総会と年2回発行の会報誌とモーツァルトに触れる機会を生んでくれる関係者のみなさまと会員の皆さまに改めて御礼を申し上げつつ、今宵の音楽に浸れる幸せをかみ締めたいと思います。

追伸。この会報誌の原稿を書きたくらいという方がおりましたら是非加藤代表か事務局本田までお気軽に声をおかけ下さい。是非たくさんの方からメッセージをいただければ幸いです。(K575)

モーツァルト一広場ではいつでも会員を募っております (H22年6月現在108名)

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000 (諸会費、別途)

お問い合わせ・・・イヤタカ内

加藤 携帯電話 090(7939)4058 又は 本田 (事務局) 080(1673)8322